

## 自由論題2 内モンゴルの近代と現代

シバゴチン・チョロモン（桐蔭横浜大学大学院）

内モンゴルにとっての「文化大革命」——スケープゴート作家ウランバガナを中心に

全世界を震撼させた中国の「プロレタリア文化大革命」は、1966年5月16日付けの「中国共産党中央委員会通知」、つまり「5・16通知」の採択によってはじめられた。それはなんと内モンゴルから始まったといわれるほど、内モンゴルは早々と「文革」の嵐に巻き込まれた。政府の公式な見解によると、内モンゴル「文化大革命肅清キャンペーン」中には、「計346,000人が逮捕され、27,900人が殺害され、12万人に障害が残った」とされている。このモンゴル人大量虐殺を「社会主義中国の制度的な弊害の一つ」ととらえる研究者もいる。これは、正義であれ、被害であれ、象徴的なのは、一人のモンゴル人作家がでっち上げた「内モンゴル人民革命党事件」をめぐる展開されたモンゴル人の過去の歴史に対する清算であったと指摘されている。たしかに、内モンゴルにとっては、1891年の「金丹道事件」以来、「モンゴル人を襲った空前の災害」とも言われている。その被害に内モンゴルのエリートたちが数多く殺害され、約半世紀に亘って形成してきた内モンゴルの近代知識人層が総崩れになったのである。これが今日の内モンゴル現状を生み出した一つの大きな原因ともいえよう。また民族問題など現代中国政治社会のあらゆる問題を理解するには欠かせないカギとなる研究課題である。ここで取り上げる人物は、「文化大革命」以前の中国で内モンゴルを代表するもっとも有名な少数民族作家として知られた。その代表作『草原の烽火』は、中国にとっては都合の良い抗日運動をテーマにした長編小説で、なんとモンゴル語、英語、ロシア語、ドイツ語、朝鮮語、ベトナム語、ウクライナ語などに翻訳され、全社会主義陣営の国々にまで広く知られた。中国では1958年から2008年現在まで何回も出版し続けた。作家ウランバガナは、「文化大革命期」に「内モンゴル人民革命党事件」に異常に関わったので、最終的に「内モンゴル文化大革命のスケープゴート」にならざるをえなかったが、文化大革命を経験したスウェーデンの漢人研究者は、「内モンゴル自治区における文化大革命の最大の特徴は、その民族問題にある」との立場を明確にしている。そして「内モンゴル人民革命党」肅清運動が残した禍根は、深刻な「民族間衝突」だと結論つけた。だから、内モンゴルにとっての「文化大革命」は、皆が言うような「中央の一部の指導者たちの単純なあやまりであった」という解釈で済むのかという疑問が問われる。特に内モンゴル近現代史を理解するには「文化大革命」を避けてはならない。しかし、この領域の研究はまだ開かないままである。「文化大革命」が終結したときに、内モンゴルでは一人の作家が「文化大革命の罪」に問われて「唯一異例の裁判」にかけられた。これを研究者たちはスケープゴートと名づけている。加害者でありながら被害者にもなった作家ウランバガナは、実に内モンゴル文化大革命のカギをにぎる存在である。作家ウランバガナを無視して内モンゴルの「文化大革命」を理解できないことも明らかである。

しかし、文学研究も含めて、作家ウランバガナを研究対象に扱うことは非常に少なく、「文化大革命」やウランバガナをあえて避ける研究者が多い。本研究には、この謎の原因を解きたい狙いが含まれている。そして、この人物を通して内モンゴル近現代史を考え直す目的で、その時期の歴史を新しい視点から読む道筋を明かす試みにしたい。